



命の大切さを知る、身近な動物園

天王寺動物園

最近、天王寺動物園が脚光を浴びています。大阪市の中心部にあるにも関わらず、自然に囲まれ、のんびりとした表情の動物の姿を見ることが出来る「都会の中にある憩いのスペース」として、人気を集めているとのこと。本動物園は都会の中にある動物園ながらも、動物たちを野生に近い環境で展示する「生態的展示」を行っています。飼育員による動物の特徴や生態の説明もあり、今、人間が直面している環境問題や、命の大切さを学べる総合学習の場となっています。入園料500円で一日過ごすことができますのも魅力的です。今回は、天王寺動物園についてお話を伺いました。

天王寺動物園の沿革

天王寺動物園は大正4年（1915）1月1日に開園し、今年で96周年を迎えました。その前身は、明治17年（1884）に本町で開園した府立大阪博物場付属の「動物檻」です。明治36年（1903）に、現在の天王寺公園から新世界周辺で開催された第5回内国勧業博覧会の「余興動物園」で人気を集めていたトラ、ヒョウ、ライオンなどの動物を買い取るなどして、規模を大きくしました。しかしながら、明治42年（1909）に発生した大火事「北の大火」を受け、大阪府は「動物檻」の廃止を決定。博覧会跡地に動物園開園を考えていた大阪市が動物たちを譲り受け、天王寺動物園を設立することとなりました。昭和のはじめに人気を集めたのがアフリカのとある部族で飼われていたチンパンジーのリタです。彼女は竹馬、自転車を使い回し、大工仕事もする、ナイフとフォークを使って食事をし、食後にはたばこを一服する、といった多彩な芸を見せました。動物を見せ物にするような公演に対し、「動物園は、珍しい動物を見たいという人間の好奇心を満たす場なのか？」という批判の声もあがったそうです。

戦時中は、職員の応召や餌不足などが深刻な問題となりました。チンパンジーに軍服を着せ、防毒マスクを付けさせて、「動物も頑張っている」と戦意高揚の役目を負わせたことも。昭和18年（1943）、空襲による猛獣の脱出を懸念した日本動物園水族館協会は猛獣の処分を了解。天王寺動物園では、当時の寺内園長が猛獣処分の先延ばしに努力しましたが、上野動物園での処分を受けて、ライオン、トラ、ヒョウなど10種、26頭が処分されました。動物園の歴史の中にある悲しい出来事です。

戦後、ゾウもキリンもライオンもいない動物園は、ライオンの剥製を飾って再スタートしました。海外から動物を購入する余裕はなく、農家からウサギを買ったり、キツネや野

鳥を職員が捕獲するなどして種類を増やしていきました。動物たちの餌を、アメリカ兵の残飯で凌ぐこともありました。本来、夢を膨らませる場であるはずの動物園の惨状を見た子供たちが、「是非、ゾウが欲しい」と大阪市長に懇願したのもこの頃です。見かねた貿易商が昭和25年（1950）にタイから雌ゾウを輸入し、寄贈しました。これが「春子」です。当時、「大阪復興の星」と呼ばれた春子は今も健在で、毎日、元気に動物園で子供達を喜ばせています。

高まる動物園の役割

戦前の動物園は、日本では見ることが出来ない世界の動物を紹介することが主な目的でした。飼育されているライオンやゾウなどの個体は展示できても、動物たちの生態などを紹介するまでには至りませんでした。

最近では、北海道旭川市の旭山動物園のように餌のやり方を工夫し動物の予期せぬ動きをみせる「行動展示」など、様々な工夫を凝らした展示がされるようになっていきます。天王寺動物園では、生息地の環境を再現したフィールドで、動物たちがそれぞれの自然に近い姿で暮らす「生態的展示」を行っています。例えばカバ舎では、水中での生態が観察できるように、プールの側面をガラス張りになっています。これで、カバ本来の授乳シーンが見ることが出来ます。ゾウ舎の床面をコンクリートではなく土の床にすることで、鼻で土浴びするのを見ることが出来るようになりました。植物もフィールドに合わせたものを植えているので、動物たちの本来の生活環境が再現されています。動物たちの生き活きとした動きや、生きるための活動を見ることは、「命」を考えるきっかけとなるかもしれません。

天王寺動物園では、「動物園は環境問題を考えるのに適した施設」だと考え、様々な情報発信を行っています。飼育員の方が、地球温暖化による気候変動が野生動物に与える影響を動物舎の前で説明するのはその取り組みのひとつ。例えば、ホッキョクグマの場合、生息域のアラスカ、ロシア、グリーンランド、ノルウェーの北極海では、この100年間で気温が2℃上がつたと報告されています。ホッキョクグマは凍った海の上から氷の下を泳いでいるアザラシが呼吸しに水面上上がって来るところを捕らえます。しかし、気温が上がり氷の張りが遅くなったり、融ける時期が早くなれば、狩猟ができなくなってしまう。カナダでは人間が捨てたゴミをあさるホッキョクグマの姿や、母熊の栄養不良で母乳が出なくなつて子熊が餓死した例が確認されています。こういった事例を紹介し、環境問題を考えるきっかけを提供しています。

動物園では毎日のように、命をめぐる動物たちと人のドラマが生まれています。以前、天王寺動物園でユキコというホッキョクグマが、初めての出産で3頭を産んだところ、子熊を死なせてしまったことがあります。野生では雪中に穴を掘り、そこで出産しますので、暗い部屋に閉じこめ、絶食状態を保つとともに飼育員も



天王寺動物園の「アザラシの初泳ぎ」(午後1時30分)

動物舎内に入らず、落ち着ける状態を作る必要があります。しかし、この時は閉じこめるタイミングに失敗したのです。最終的にユキコは9頭出産し、3頭が生育したのです。「いまの子供たちは、生きた動物のぬくもりを知らなければ、その生きものが、どのような環境で生きていて、なにを食べているかもまったく知らない。人間形成にとって最も大切な自然とのかかわりあいがないまま、大人になっている。今ほど動物園の役割の大きいきはありません」と、宮下実名誉園長は語ってくれました。

※次号は天王寺動物園第二弾「生態的展示」と「飼育員と動物との関わり」について紹介します。

天王寺動物園

大阪市天王寺区茶臼山1-108

TEL 06・6771・8401

<http://www.jazga.or.jp/tennoji/>

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞